

ベストクラス選定理由書

作成者：須田康之 北谷隆太郎 阿曾奈生

科目名称 特色あるカリキュラムづくりの理論と実際 A (担当教員名：關 浩和 教授)	
課程 : 学部・大学院 (修士・ <u>専門職</u>)	開講時期 : <u>前期</u> ・後期
授業形態 : 講義・演習	授業規模 : 30名程度
インタビュー対象教員名 關 浩和 (実施日時：平成 28 年 7 月 4 日 14:50～15:50 ; 実施場所：教育・言語・社会棟 727 号室)	
インタビュー対象受講者名 石田誠 (授業実践開発コース) 田邊勝彦 (学校経営コース) 伊林淳弥 (学校経営コース) (実施日時：平成 28 年 7 月 20 日 13:30～14:20 ; 実施場所：教育・言語・社会棟 506 号室)	
<p>選定理由</p> <p>授業者と受講生への聞き取り、本年度の授業参観を行い、次の3点から本授業をベストクラスとして選定する。</p> <p>まず、1点目は学習者に対する意識である。授業者へのインタビューから学習者を意識した発言が多く、何度も「受講生」＝「学習者」について語るが多かった。例えば、インタビュー冒頭より、これまでの経験から現職教員は学び手としての質が高く、理論と実践の融合について意欲が高いと述べられた。また、「学生の履歴」という言葉を用いて、学習者の背景にあるこれまでの学びの履歴や生活経験にも配慮すべき点があると主張された。対象が学部生であれ、現職教員であれ、その背景を理解した上で、授業を進めなければならないという姿勢が見られた。学習者の実態を踏まえた上での授業づくりが進められている。</p> <p>次に、学習内容についてまとめる。本授業では教育課程の変遷、カリキュラムの類型化、そして、実際のカリキュラムマネジメントに関するグループワークを含む演習までが組み込まれている。15回という回数の中で、多くの内容をどのような構成にして進めていくのかということが重要になる。学習者の実態と学習内容の両面から捉えた計画的な内容となっている。大学教育において授業者の専門性が高ければ高いほど、専門知識を伝達することに傾斜しがちな授業が多い中、本授業に関しては、研究者としての専門性と、教師としての学習者理解が融合した形で、教材を理解し、授業の素材として変容させていることを挙げることができる。</p> <p>3点目は、授業展開についてまとめる。受講者からは、板書、資料提示、テキストという授業展開に関する言葉が出てきた。授業者は、板書を構造的にまとめることや、板書・配付資料・プレゼンを連動させることは、一時間のねらいに迫るために重要な要素だと主張した。テキストの利用やリフレクションカードによるふりかえりも特徴的である。本授業用テキストを作成し、授業だけでは補い切れない内容を学習者が自ら学べるようになってきている。また、リフレクションカードは学習者の学びの把握、評価資料という側面だけでなく、前時と本時を結びつける役割を果たしている。授業の導入に前時のカードの内容を全体に読み、授業が進行していく。いずれにおいても学習者を大切にしたい授業展開が行われている。</p> <p>本授業が高評価であるのは、關先生自身が毎回の授業を楽しんでいることが挙げられよう。提示資料や短冊カードの作成、板書計画の立案、リフレクションカードの評価、授業づくりの段階で、学習者を想定し、学習内容をどう伝えればよいかを考えておられる。授業をつくる楽しさ＝教師の醍醐味をさらに味わおうと、未だ教師自身が学び続けており、自らの学びの履歴を更新されていることに、本授業の素晴らしさがあると考えられる。</p>	